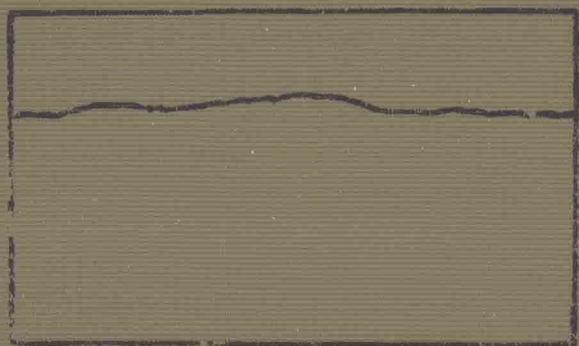




八木義徳

返地平

遠い地平　とおいちへい

印刷　昭和五十八年十一月五日
発行　昭和五十八年十一月十日

著　者　八木義徳　やぎよしのり

発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社



〒一六二　東京都新宿区矢来町七十一
電話　業務部〇三（二六六）五一一一
編集部〇三（二六六）五四一一
振替　東京四一八〇八

印刷所　東洋印刷株式会社
製本所　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替いたします。

© Yoshinori Yagi. Printed in Japan, 1983.

定価　一五〇〇円

目次

遠い地平

帰郷
7

北へ往く
29

時計台
55

羽根のように
83

逃亡の時

105

北満の落日

129

熱い季節

153

音楽の鳴るとき

183

遠い地平

209

裝
幀
公
司
修

遠い地平

歸鄉

十七年ぶりの帰郷だった。

私は室蘭駅の改札口を抜け出ると、町の高台にある八幡神社をめざして、まっすぐ歩き出した。それは私の意志というよりは、脚自身が勝手にその方向へむかって歩き出したというに近かった。何か眼に見えぬものに曳かれて行く。そんな感じだった。駅前から坂を一つ登って泉町の通りへ出る。その通りに面して高く立った石造の鳥居をくぐり、そこから傾斜のかなり急な八十段ほどの石の階段を一段ずつゆっくり登った。途中で息が切れた。昔、子供のころはこの階段を二段飛びにして幾度も駆け登り駆け下って競走したものだ、あの疲れを知らぬ仔鹿のような強健な筋力は、もはや私の体のどこにもない。が、それは私の三十八歳という年齢のせいではなく、復員以来三年間の私自身の自堕落な生き方のせいだろう。

石段の途中で二度ほど休んでから、やっと境内へ出た。境内は荒れていた。社殿も老い朽ちていた。辺りに人影はなかった。戦争中は出征兵士のための戦勝祈願で賑わったであろうこの神社も、敗戦によって町の人たちから見捨てられてしまったのか。それとも進駐軍による国家神道禁圧のため、社殿の復興には手がつけられずにいるのか。しかし私には、幼いころの記憶をそのままに残したこの老い朽ちた社殿のほうにむしろありがたかった。賽銭をあげ、鈴を鳴らし、大きく拍手を打った。

それが自然に私の十七年ぶりの帰郷というこのふるさとの町への挨拶となった。

しかし帰郷とはいっても、私にとって肉親縁者と名付くべき者はもう一人もこの町には残って

いない。わずかに忘れたい存在として、数え三つの年まで私に乳を飲ませてくれた乳母の家が一軒残っているだけだが、その乳母もすでにこの世のひとはない。その上、本籍地も墓地もすでに東京へ移してしまっている。その意味で、私は明らかに一個の「棄郷者」であった。

昭和七年、二十一歳の年、私はこの町を棄てた。棄ててから十七年間、私はこの町へ帰らなかった。その理由は簡単だ。望郷とか懷郷とかいう言葉にふさわしい感情が、ほとんど私の体の中から消えてしまっていたからである。その私が十七年ぶりでの故郷の町へ帰ってきたのは、単純な理由からだ。私は疲れたのだ。その疲れが私を自分の生れ育った土地へ呼びもどしたのだ。

それにしても氏神とがみというのは不思議なものだった。棄郷者であり、かつ一介の旅人としてやってきたはずの私が、駅の改札口を抜け出るなり、私自身の意志とは関係なく、二本の脚が本能的に動いて、私の体をこの丘の上の氏神の前へ運び上げてくれたのだ。私は信仰という名に値あたするものを全く持たぬ人間だった。神とか仏とかいう言葉は、私にとっては一個の抽象的な觀念語にすぎなかった。

そうだ、思い出すことがある。

―昭和十九年春、華中戦線。中国の首都南京の兵舎を出発したわが中隊が、ひと月近い行軍を経て湖南省のある山間の部落に駐屯したとき、すでに五十歳をすぎた老准尉は、中隊全員を整理させて、いよいよ明日から作戦地域に入る、いづどいうことが起るか分らない、遺髪と爪を紙に包んで奉公袋に納めておけ、という命令を下した。兵隊たちは戦火に焼け崩れて土壁だけの残った幾つかの農家に分散して入り、その作業に従った。それは、いわば明日からの「死」に対す

る準備であつた。その作業が終つたとき、私の周りにいる何人かの兵隊のなかから、時ならぬお経の合唱が湧き起つた。敷藁の上に、ある者は端坐し、ある者はあぐらをかき、両手を合わせ、眼を閉じ、背筋をまっすぐに立てて、節のついたお経の文句をひくく静かな声で唱えている。それが呪文のような奇妙な言葉で終つたところで、二等兵の私は、すぐ隣りの上等兵に質（な）ねてみた。「いまのは何というお経ですか？」

鼻の下に黒い髭を生やした上等兵は、けげんといった顔つきで私を見返しながら、

「なんだお前、これを知らんのか。はんにやしんぎよう、と言ふんだ」

「はんにやしんぎよう？」

それが般若心経という名のお経であり、しかも字数にしてわずか二百三十字にもみたぬ、お経のなかでは最も短いお経であることを私が知つたのは、戦後復員してからのことである。

私が応召入隊したのは石川県金沢市の東部第四部隊というのであつたから、大隊長以下将校下士官はすべて石川県の出身者で固められていた。私の所属する第二中隊でも、おなじ石川県出身の兵隊がいちばん数が多かつた。そしてわれわれ関東近県から応召した者たちをふくめて、妻子持ちの老兵が大半を占めていた。私は昔何かの本で、親鸞の何代目かの子孫に当る蓮如以来、越前から加賀、能登、越中にかけてのいわゆる裏日本一帯が、浄土真宗の信仰の最も篤く深いところだということを讀んだことがある。が、それは活字の上の知識にしかすぎなかつた。ところが、いま、その加賀や能登の農民出と思われる兵隊たちが、讀みなれた国語讀本を暗誦する小学生のように、何の苦もなくお経を暗（か）んじ唱えるさまを、眼のあたり見たのだ。彼らが果してほんものの信仰者であるかどうかは、どうでもよかつた。ただそのときの私が、いざという場合、と

もかくも祈るべき言葉を持つてゐる彼らにいささかの羨望を感じたということだけは、たしかな事実だった。

―その五年前の記憶が、いまふいに甦ったのも、やはりふるさとの氏神の前に立つたからだろうか。

私は拝礼をすまずと、社殿の裏へまわった。そこから先は栗や櫟や檜の雑木林である。林の中にひと筋の細い山道がつづいている。深い熊笹に覆われて山道はほとんど姿を隠しているが、私にはかまわずそこへ踏みこんだ。その蛇のようにうねり曲った細い道をたどって行けば、どこへ行き着くかを、私の二本の脚がしかと記憶していた。林はしだいに深くなり、木や草の匂いがつく鼻を撲ってきた。都会では嗅ぐことのできない匂いだった。

半時間ほどして、私は小さな山の頂上に立った。海拔二百米のその山は測量山という奇妙な名前で称ばれていた。明治五年、開拓使のお雇外人であるワーフィールドが、室蘭から札幌本府への道路を開鑿するに当って、測量機器をこの山の頂上に据えつけたところからこの名がつけられたという。

頂上からは市街と港と対岸の山々がひと眼に展望された。さして高くないその山々のつらなりの向うに有珠山と昭和新山が顔をのぞかせ、さらに視線を西から南へ転じて行けば噴火湾を越えて駒ヶ岳と、そして先端に恵山岬のある亀田半島が青霞んで見えた。

私は山頂に腰をおろし、ポストンバッグの中からウィスキーの小瓶を取り出した。それは昨夜上野から青森への夜行列車のなかで睡眠薬代りに飲んできたものだが、まだかなりの量が残っていた。私は瓶に口をつけて、少量ずつ咽喉の奥へ流しこんだ。

この小さな山の頂上が、中学時代の私にとって〃もの思う〃場所だった。思春期の若者の最大の敵は性欲である。私は毎夜この敵と烈しく闘いながら、ほとんどいつもみじめな敗北を喫し、そのつど憂鬱で自蔑的な朝をむかえなければならなかった。私はしばしばこの山に登って頂上に腰をおろし、山と海と空と、視野の高く遠くひろがった空間のなかの一点の存在としてわが身を置きながら、この夜の難敵といかに闘い、いかに打ち勝つべきかを真剣に考えた。ある夜、私は女中のお民さん（子のない寡婦で、もう四十過ぎの女だった）に頼んで、自分の両手を三尺帯で固く縛ってもらってから寝た。が、蒲団のなかであの黒い欲望が頭をもたげ、やがてそれに火がついて赤い炎がめらめらと燃え出すと、私は自分の歯でその固い結び目に齧じりつき、たちまち帯を引きほどこしてしまうのだった。またある夜は、町の金物屋から買ってきた一本の錐をひそかに敷布団の下に忍ばせて寝た。欲望が兆^{きざ}すと、私はその錐で太腿を刺した。深く突き刺すだけの勇氣は私にはなかった。それでも一瞬の鋭い痛みが、赤い炎を消してはくれた。が、痛みが去れば、炎は息を吹き返した。私はまた刺した。こうして幾度刺したか、朝になったとき、私のゆかたの寝間着には赤い血の跡がかなり大きな円形となってにじんていた。私はお民さんに、膝頭にできたかさぶたがあまり痒いので、夜眠っているとき夢中でひっ搔いて剥がしてしまったのだと嘘をいい、それを至急洗濯してくれと頼んだ。錐は一夜で捨てられた。

私は剣道の稽古に熱中しはじめた。あの夜の黒い欲望に打ち勝つためには、自分の肉体を徹底的に苛めつけるよりほかに方法はなかった。やがて私は剣道部の正選手となり、先鋒か中堅か、ときには副将を勤めるようになった。選手たちの中では最も身長の高い私の得意業は、出小手と抜き胴であった。わが中学の対外試合の相手は、おなじ町の商業学校と警察署であったが、私

は剣道四段と称する巡査部長と三度闘つて三度斬り捨てるという腕前に達した。(私の中学では、校長の方針で、柔剣道部とも生徒が有段者の資格を取ることは固く禁じられていた)放課後も道場に残つて、暗くなるまで稽古に打ちこんで家に帰ると、さすがに肉体の疲労は烈しく、夕飯のあと申しわけに教科書をひらいていても、ただちに睡魔に襲われた。むろん床の中であの黒い欲望が頭をもたげることがたびたびあったが、それに火がつく前に私は深い眠りに落ちていた。その夢のなかで無意識に精を洩らすことはあつても、それは私に自蔑的な感情をあたえなかった。むしろ朝の目覚めはさわやかでさえあつた。

その私の前に、いつのまにか一人の小娘が、鮮明な輪郭をもって姿を見せるようになった。私の家のすぐ筋向いにある芸妓置屋「松乃家」の半玉である。本名を千代、芸名を千代丸とよぶその十六歳の小娘が、私の最初の恋愛の対象となつたのである。

しかし、剣道部の選手としてみずから「硬派」をもって任じていた私は、おなじクラスのなかで、美しい女性への憧れや、恋の悩みなどを甘たるい感傷的な言葉で臆面もなく詩や短歌につくつてよろこんでいる連中を「軟派」としてひそかに軽蔑していたから、自分のなかにはじめて芽ばえたこの恋愛感情をも「女々しい」ものとして拒否しなければならなかつた。私の家と「松乃家」はせまい小路の中にあるのだから、日に何度か顔を合わせる。そのつど、私は自分の顔面筋肉を能面のように硬直させては、ぶいと視線を横にそらすのだ。それが精いっぱい私の抵抗だつた。

だが抵抗すればするほど、夜の床のなかで、千代の幻影は一層美しく、一層鮮明なものとなつて私を苦しめた。さいわい夜の想像の世界のなかでは、私は自由に千代に話しかけることができ

たし、またその白い裸身を抱くこともできた。しかし私の抱いている千代の軀には、肉の感触もなく、体温もなかった。それは一個の幻影にすぎなかった。私はその幻影を抱きながら、むなしくいら立ち、そして烈しく消耗した。朝、目が覚めたとき、私はきょうこそ千代に言葉をかけてやろうと自分にいいきかせた。が、小路のなかで千代に出会うと、反射的に私の顔はこわばり、視線はたちまち横を向いてしまうのだ。夜の世界のなかでその千代の軀を抱いているという汚れの意識が、かえって千代を拒否させてしまうのだった。

私の初恋は、二月末のある吹雪の一夜、千代とほんのわずかの言葉を交わしただけで、あっけなく終りをつげた。それからまもなく千代は私の前から姿を消してしまったからである。

「それにしても、自分にとって思春期というやつは、何といううす汚れた季節だったろう」

十七年ぶりにこの故郷の山頂に腰をおろした私は、何度目かのウィスキーを口にふくみながら、そう思った。酒の酔いが私を感傷的にしていた。

「いや、たとえうす汚れた季節だったにしろ、自分は闘うことは闘ったのだ。いかにも幼稚で不器用な闘い方ではあったが……」

しかし、その幼稚で不器用な闘いは、思春期といわれる季節だけで終わったのではなかった。それは三十八歳のこんにちまで、ほとんど変ることなく尾を曳いている。それが私という人間の生き方だった。人間はだれでも幾通りには生きられないのだ。一見どんなに波瀾にみちた生涯でも、その軌跡図を描いてみれば、おのずから一定の型に還元されるだろう。その型こそ、つまりはその人間の生きた証^{あかし}なのだ。

「なるほど、この山の頂上は、かつての自分にそうであつたように、現在の自分にとつても」